

ここは、地球からおよそ150万Kmの距離にあるL2ステーション。地球と太陽の引力と公転軌道の遠心力がバランスする第2ラグランジュ点（L2）にある巨大な宇宙都市である。ここにあるスペースアカデミーは、多くの宇宙船乗りを育ててきた専門教育機関だ。アカデミーはその専門課程、つまり、宇宙船運航に必要な様々な専門分野に特化した教育課程と、基礎課程、つまり、一般教育と専門課程に進む前の準備を行う教育課程に分けられている。そして、後者の基礎課程は、一般の高校教育課程を含んだ形で行われている。形としては一貫教育ではあるが、基礎課程修了後に他の方面へ進む可能性も考慮して、名目上分離されているのである。そのため、基礎課程は附属高と呼ばれたりもする。

俺は中井ケンジ、今日から附属高の2年になる健全な男子である。いましがた新学期の始業式が終わり、教室に戻ってきたところだ。実のところ、この一年ほど、附属高のレベルの高さに、かなり打ちのめされてきた。進級だって恥ずかしながら追試のあげくによくやく・・・とあったところだ。本来、どうして俺なんかがここに入学できたのか、自分でも不思議なのだが、俺には時々、神ががりみたいなことが起きる。それは、システムを介して他の誰かと情報共有している時に突然発生する。それが起きると、自分が知らなかったことや、経験もしていないようなことが、なぜかすべて知っていたことのように理解できてしまうのだ。この附属高の試験の際にも、それは起きた。そのおかげで、俺はここに入れたわけだが、入ってからはさっぱりで、一年間ついて行くのに苦労してきた次第だ。

最後にそれが起きたのは、入学式前日。地球から入学式が行われる第6静止軌道ステーションまでのフライト中だった。地球低軌道で軌道間遷移のための待機中に強烈な太陽嵐が発生、生じた磁気嵐でパイロットがインターフェイスのオーバーロードを起こして意識を失い、たまたま居合わせた俺と、今、前の席に座っている美月、フルネームは星野美月・ガブリエル、彼女の両親は遺伝子工学者、とりわけ父親は教科書にも名前が出てくるアンリ・ガブリエル・・・という、まあ、なんとというかセレブのお嬢様なのだが、その美月と俺の2人が、どういうわけかパイロットの代わりをすることになってしまったわけだ。

言っておくが、最初にそれを言い出したのは俺ではない。この美月である。だが、結局俺も巻き込まれ、それからが大変。何度も襲ってくる磁気嵐でシステムをやられながら、なかばアクロバットみたいな操縦をして、墜落を回避、加速ステーションとの無理矢理のランデブーで、静止軌道に上がるための移行軌道であるトランスファー軌道に乗せてもらったのはいいが、燃料切れとかコンピュータの不具合とか、またしてもトラブルに襲われ、救援のタグボートとのランデブーにも失敗してしまう。もうこれまでか・・・と思った時に、非常通信を聞きつけた大型の恒星間貨物船、ヘラクレス3に救助されたという顛末。その途中、操縦のためのバーチ

ヤル・パイロット・インターフェイス（VPI）を使って、TS5型シャトルのシステム経由で美月と情報共有モードに入った時、それがまた起きた。俺たちが生還できたのは、その「神がかり」のおかげだったのかもしれない。だが、それ以来、そんな力とは、ずっとご無沙汰だ。

ちなみに、美月は去年、俺とは別のクラスにいて、しかも俺とは違うタイムゾーンにいたので、ほとんど会うことがなかった。こうした宇宙都市は、多くが8時間差のある3つのタイムゾーンに分かれている。こうして生活時間に差をつけることで、24時間、都市機能を維持しているわけだが、生活時間は一部重なるものの、一方がオフの時、他方は授業があったりするわけで、交流できるタイミングはかなり少ないのだ。

人工重力装置が一般化している現代の宇宙都市では、もはや昔のように回転による遠心力で重力効果を生む必要が無い。そのため、都市は円筒形のステーション（正確には円筒形の強化シールドで覆われた正三角柱）の表面に配置され、24時間で一回転して昼夜を生み出すようになっていく。天井の強化シールドは適切に太陽光を調節、散乱して地球の青空のような景色を作り出してくれる。もちろん朝夕の空も再現されるので、生活感覚は地球上にきわめて近い。唯一違和感があるとすれば、またたかない夜空の星くらいだろう。それはすばらしい満天の星空だが。

まあ、あまり一度に多くのことを話してもしかたがないので、これまでの話はおいおいするとして、今の話に戻ろう。2年目からは基礎課程でも、実際の宇宙艇を使った訓練が実施される。そのために1年では基本的なシミュレータ訓練を終わらせてある。生徒は、それぞれの役割、つまりは志望する専攻科目ごとに、各実習チームに参加する。1チームは、パイロット2名、ナビゲーション1名、エンジンアリング1名、コミュニケーション&インテリジェンス、略してC&I1名、そしてメディカル1名の6名で編成される。これが、小型宇宙艇一機を飛ばすためのクルー構成だ。ちなみに、俺と美月はパイロット志望である。チーム編成は、学年のはじめに、各自の希望を入れながら調整して決めることになっている。だが、実は俺たちのチームは既に数日前、美月を含めて全員決められてしまっている。うちのクラスの担任教師であるフランク・リーブスと、その他女子2名の陰謀によるものだ。今朝発表されたクラス分けも、それを反映して、チーム全員同じクラスである。まさに教師の職権恐るべし・だ。だが、美月はまだそのことは知らない。そもそも、こうなった理由は美月が持つ特殊なコンポーネント構成、というよりも、脈絡無く詰め込まれた雑多なコンポーネントが情報氾濫を引き起こすことで、ゾーン2、つまり美月が元々いたゾーンでチームが組める相手がいけないということにあるわけだ。これは彼女自身のせいではなく、遺伝子工学者である両親の仕業なのだが、なぜか俺と組むと、うまくいってしまうのは、先に話したシャトル事故の際に実証済みである。（個

人的にはあまり嬉しくもないのだが・・・)なので、フランクは、美月をこのゾーン1に移動させたというわけだ。

これはあまり思い出したくないのだが、シャトル遭難で覚悟を決めた時に、俺は美月に、お前を守ってやるとか、ずっと一緒にいるとか言ってしまったのである。もちろん、追い詰められた状況下でだが、そのときは本心から出た言葉だったような気がする。だが、奇跡的に助かって、その後、美月はどうやら、その言葉を根拠に俺を下僕化しようと考えてしまったようなのだ。去年、一年離れたことで、もう時効だろうと思っていたのだが、そう甘くはなかったらしい。さて、今年も前途多難である。

「よし、席に着いてくれ」

担任教師のフランク・リービスが入ってきた。フランクは、昨年はゾーン2つまり、今俺たちがいるゾーン1より8時間遅いタイムゾーンを受け持っていたのだが、今年からこちらに移ってきた。昨年俺たちの入学と同時に着任した2年目の教師で、恒星物理が専門の研究者だ。教師は研究の片手間という話だが、パイロットとしての腕前もかなりらしい。それに女子の人氣ランキングはトップレベルのイケメン教師である点がちよつと憎らしい。

「さて、明日から授業が始まるわけだが、その前に、今年度の実機演習のチームングを決めなければいけない。そこで、各自、まず自分が組みたい相手をこのフォーラムに入力してもらおうと思う」

フランクがそう言うと、俺の目の前に、記入フォームが表示された。これは、教室のアウトバンドインターフェイスを経由して、俺の視覚に直接投影されている。アウトバンド、正しくは、アウト・オブ・バンド(帯域外)インターフェイスは、視覚や聴覚の拡張により、可視聴域外の光や音を通信手段として使って、外部と情報交換するためのコンポーネントである。そして、それは基本的な遺伝子コンポーネントの一部として、すべての人が保有している。なので、直接、送られてくるこのフォーラムは自分にしか見えないし、これに記入した内容を他の生徒に知られることもない。

「念のため言っておくが、もちろん希望がすべて通るわけじゃないぞ。希望が重なるような場合や、適切な組み合わせでないと判定される場合は、違うメンバーと組むことになるから、承知しておいてくれ。それから、一部の諸君には、あらかじめ、私の方から推奨するメンバーを記入してある。異議がなければ、そのまま出してもらえると助かる。」

そういう意味では、俺に渡されたフォームには既に全員の名前が記入されているわけで……、たぶんこれは他のメンバーも同じだろう。つまり、数日前の根回し通りの人選になっているわけだ。ちなみに、俺のチームは、俺、美月の2名がパイロット。それからナビゲーションに沢村ケイ。彼女は入学式当日に出会って以来、一年間同じクラスで、シミュレータ実習も同じチームだった。とにかく元気で賑やか、ちよつと脱線気味な女子である。そして、エンジニアリングは、ジョージ・エイブラムス。ゲーム好きでオタク、しかしちよつと天才肌で遅刻と居眠りが玉にキズの男子である。基礎課程1年目にしてアカデミーのセンターコンピュータをハッキングしてしまい、謹慎を食らったのは、教師や生徒たちの間でも有名だ。今日は、初日から遅刻でフランクにお灸を据えられた。彼も1年間一緒にチームでケイや俺の遊び仲間だった。メデイカルはマリナ・クレア。附属校トップ入学で、その後も試験ではずつとトップをキープしている優等生女子。前期はこのクラスの委員長に決まっている。でも、このメンバーの女子の中では最も性格が素直というか、天然というか……、いい感じの女子だ。彼女も入学式当日に出会った一人。昨年、クラスは違ったが同じゾーンだった。ケイと仲がいいので、時々、一緒に遊んだりしていたからよく知っている。C&Iは美月と同じゾーン2から移動してきたという謎の女子、サマンサ・エドワーズ。彼女に関しての情報はまったくない。そして、リーダー役は俺らしい。なんで俺？と思うのだが、確かに考えてみれば、一筋縄でいかない連中ばかり。誰がやってもなにかしら問題が出そうだ。まあ、中でも一番取り扱いが難しい、星野美月の扱いに慣れている（あまり慣れたくはない……のだが）俺が適任なのかもしれない。

「よし、記入したら提出してくれ。あとは、システムが希望をとりまとめて、総合判断して決めてくれるはずだ。」

ちよつと抵抗してみたい気もしないではないが、それはたぶん無駄だろう。この組み合わせは、システム上では既に確定扱いになっているはずだ。変えたところで戻されるのがオチである。残念ながら受け入れるしかない。俺は、そのまま提出ボタンにタッチする。

仮想的な画像にタッチするというのもおかしな話だが、アウトバンドを使った情報交換では、入力にこうしたジェスチャーを使う場合が多い。それに、単なるジェスチャーではなく、ちゃんと触った感触がフィードバックされてくるのである。俺の動きをモニターしているコンピュータが、アウトバンドを通して送ってくる仮想現実だが、それは、実際にそこにタッチパネルがあるのと同じ感覚だ。

俺は提出してから、周囲を見回して他のメンバーの様子を確認する。ケイ、マリナ、ジョー

ジの3人はこの状況を知っているので問題ない。互いに顔を見合わせて確認している模様。さて、問題は俺の前にいる美月だ。なんとなく固まって宙をにらんでいる。(仮想映像を見ているので、そう見えるのだ)そして、いきなり俺の方を振り返って・・・

「ケンジ、なによこのメンバー。あんた、もしかして知ってたわけ？」

と、いきなり俺にくっつくわけ。

「あ、いや、俺も今見たところだ。でもまあ、知らない連中ばかりでもないし、いいんじゃないか？」

まさか、根回し済みとも言えないので、ちよつと、とぼけておくことにしたわけで・・・。

「あんたはいいわよ、でも、ちよつと出来過ぎてる気がするわね」

「まあ、確かにそうだけど、たぶん、フランク先生が俺たちのことをよく知ってるからじゃないのか？」

「・・・」

美月は、まだちよつと不満そうな顔をしている。とは言え、彼女はこのゾーンのメンバーをほとんど知らないから、他のメンバーを指名することも難しい。まあ、こいつの性格から言うと、自分に選択肢が与えられないということが面白くないのかもしれないのだが。

「まあ、いいわ。いずれにせよ、あんたがちゃんと仕事をしてくれるなら、問題ないわよね」

「え、し、仕事・・・って？」

「だって、あんたリーダーでしょ。だったらメンバーの面倒を見るのはリーダーの仕事よね。

なにか文句でも？」

「い、いや、たしかにそうだが、それはあくまで実習チームの話だよな」

「チームワークを円滑に進めるためには、普段の付き合いも重要なはずよ」

「まあ、それは確かだが・・・」

「ということ、仕事はきちんとしなさいよ！」

「あ、ああ・・・」

なんだか、こいつの仕事という言葉には、かなり個人的な内容が含まれていそうな気がするのだが、とりあえず、納得してくれるなら、今のところそれは考えないでおこう。

「星野、あとはお前だけだが・・・」

とフランク。美月は、ちよっと口をとんがらせながらも、提出ボタンに触れる。

その瞬間に、俺の前のフォームの色が変わって、確定、承認済みのステータスが表示された。

「よし、これで全部揃ったな。手元に調整結果がフィードバックされていると思う。各自、システムから最終案が提示されていると思うが、未確定になっているチームは。それで問題なければ確定させてほしい。いいかな？」

周囲を見回すと、多少首をかしげている生徒はいるものの、間もなく全チームが確定したようだ。

「よし、今日のところは、これで終わりだ。あとは、新しいチームで親睦を深めるといいだろう。では、明日からよろしくな。」

フランクはそう言うと、手を振りながら教室を出て行った。生徒たちは、それぞれのチームごとに集まりだしている。ケイとマリナ、そしてジョージが俺たちの所へやってきた。

「さて、親睦でも深めてみますか？皆さん、よろしくっ！」

「なかなか面白そうなチームだね。パワーありそうだし。楽しみだね」

「皆さん、よろしくお願いしますね。」

「ああ、みんなよろしく」

「・・・」

見たところ、美月はまだちよっと不満そうにしている。

「ねえねえ、星野さん。ゾーン2の話も聞かせてよ」

とケイがすかさずジャブを放つ。

「話す事なんて何もないわよ。どうせ私はあっちでも疫病神だったんだから。あんたたちも覚悟しといたほうがいいわよ」

と美月が軽く返す。

「ふーん、ゾーン2の奴らもひどいねえ。こんな可愛い娘つかまえて、疫病神とは。まあ、どれくらい疫病神か、ちょっと楽しみだけど」

「言っとくけど、後で後悔しても知らないからね」

「大丈夫だよ、その時はこっちの下僕さんに責任とってもらうからさ」

お、俺かい？いきなりこっちに振るのか。

「あれ、ケンジって星野さんの下僕だったのか？ そう言えば、星野さんって、あの34便の時の相方なんだよね。俺は、ジョージ・エイブラムス。よろしく」

「あんたがエイブラムス？ あの、センターコンピュータをハッキングした？」

「あはは、ゾーン2でも有名になっちゃったか。謹慎3日食らっちゃったけどね。あ、俺のことは、ジョージでいいよ」

「あたしのことも、みんな美月でいいわよ。私だけラストネームじゃおかしいでしょ」

ほお、美月にしては協調的だ。こいつもゾーン2の一年間で少しは進歩したのか。

「美月さん、改めてよろしくお願いしますね。私も、マリナでいいですから」

「ケイさんも、よろしくつ。あれ、そういえばもう一人は？」

そうそう、サマンサ・エドワーズって……。と振り向いたとたんにそこに顔があった……。ほとんど、おデコにキスしそうな距離である。そんな気配はまったく無かったのだけだ。

「うわっ……」

俺はちょっとびっくりして一歩下がる。

「サマンサ・エドワーズ。C&Iを担当します。よろしく」

「あ、いたいた。私は沢村ケイ、ナビ担当です。あ、ケイでいいからね。よろしく」

「お、俺は中井ケンジ、パイロット担当。い、一応だが、リーダーということになってる。よろしくな。俺も、ケンジでいいから」

「マリナ・クレアです。メディカルを担当します。よろしくお願いしますね。私もマリナと呼んでください」

「僕はジョージ・エイブラムス。エンジニアリング担当。情報・通信系でなにか不都合があ

ったら言ってくればなんとかするよ。僕のことも、ジョージでいいから」

「星野美月・ガブリエル。パイロットよ。美月と呼んでいいわ。あつちで顔は知ってるわよね」

「よろしく。私のことは、サムと呼んで……」

これで、とりあえず全員揃ったわけだが……

「さて、リーダー、これからどうする？」

「どうって……、いきなり言われてもなあ……」

「あんたね、リーダーでしょ。そんなことも考えつかないで、先が思いやられるわ」

おいおい、そりゃ、無茶振りだろう。まあ、リーダー役そのものが無茶振りなんだが……

「とりあえず、街に出てってのはどうだい？」

ジョージが助け船を出してくれたので、俺はそれに乗ることにする。

「そうだな、とりあえず出てから考えようぜ。そうしよう」

「あいかわらず、行き当たりばったりよね。一年前と全然変わってないわ、そんなところが」

そう簡単にな変わってたまるものか……、などと俺は思いつつも無視を決め込むことにする。

だが……

「一年前って、あのシャトル事故の時の話？ それ、もっと詳しく聞きたいな。ケンジってば、いつもごまかして教えてくれないんだから」

「あ、僕も聞いてみたい。降下軌道から射出用の加速磁場に乗ったんだよね。前から興味があつたんだ」

いかん、この話は一年間封印してきたのだ。なぜなら、最後に誰もが聞きたがる部分は、最終的に救助される直前の……あの部分なわけで……。

「と、とりあえず出てから話そうか……」

と、俺は全員を促して、教室を出る。しかし、行く当てはなかったりするのだが……



「あ、この前行ったお店はどうでしょう。いい感じのお店でしたよね。あそこならお話しやすいし」

「あ、あそこね。いいかも。そうしようよ」

マリナの提案にケイがすかさず同意する。マリナさん、あなたは俺が困ったときに、いつも助けてくれる天使のような・・・

「ケンジ、あんた、そうやってこの二人と仲良くやってたわけ？」

「仲良く・・・って、そりゃ、同級とか隣のクラスとか・・・だったしな。美月だって・・・」

と言いかけて、俺は一瞬言葉に詰まった。そうだ、こいつはたぶん、一年間、孤独に過ごしてきたんだ。そう思うと次の言葉が見つからない。

「ええ、私も時々遊んでもらってましたよ。これからは美月さんも一緒ですね。楽しくなりそうです」

おお、絶妙のフォローです。マリナさん！

「だね。まあ、ケイさん的には、ライバルが増えてちよつと困るところもあるんだけど、とりあえず、仲良くやろうよ」

「おお、なんだかケンジのハーレムみたいじゃないか。羨ましいな」

おいおい、冗談じゃない。ハーレムどころか、修羅場になりかねない。俺は命がいくつあっても足りないっての。

「そんないいもんじゃないような気が・・・」

「あんた、なにか不満でも？」

「あ、いえいえ、不満なんか・・・ございませんです。」

「おお、さすが下僕殿。ご主人様には従順だねえ」

「おい！・・・」

そんな会話をしながら、俺たちは街に繰り出した。